鶴山書院報

第７号
公益財団法人
孔子の里
〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地３東原庠舎内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320
E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinosato.com
発行人
理事長 横尾俊彦

「敬天」と人材育成

～多久も訪れた広瀬淡窓の咸宜園の学風～

公益財団法人孔子の里
理事長（多久市長）横尾　俊彦

令和元年８月大雨の激甚災害のため、応援職員派遣も受けて復旧復興に力を注いでいます。

いち早く駆け付けて下さったのが日田市の原田市長さん。その後、最多時には21自治体から派遣を頂きました。その御礼のため、派遣元自治体訪問を計画しました。

ところが、中国武漢市から拡散した新型コロナウイルスが猛威となり、世界でも国内でも感染者増加中となり、佐賀でも３月13日に発生。その後も拡散状況で、政府は非常事態に関する法整備など対応に繁忙さが絶えませんし心配は尽きません。

なんとか日田市訪問はできましたが、ほかの自治体へは、新型コロナウイルス感染状況を鑑みて、やむをえず訪問を控え、感謝の思いと訪問延期の旨を記した墨筆の手紙をお送りしました。

日田の私塾「咸宜園」

さて、日田には「咸宜園（かんぎえん）」があります。史蹟・咸宜園で改めて多久聖廟と多久茂文公を回想しました。そこで今回は、茂文公が重んじられた「敬は一心の主宰」に触れたいと思います。

「咸宜園（かんぎえん）」は、天明２年（１７８２年）に日田に生まれた広瀬淡窓が、文化14年（１８１７年）に24歳の時、長福寺学寮に開いた私塾です。文化４年（１８０７年）には桂林園の開塾、そして、文化14年（１８１７年）に咸宜園の開塾となり、その後、安政３年（１８５６年）の淡窓没後も養子や門下生により引き継がれ、明治30年（１８９７年）まで存続し、閉塾までに計10名の塾主により約５０００名の門下生が巣立っています。

塾名は孔子の『詩経』から

塾名の「咸宜」とは、孔子が編集したとされる３０５編からなる中国最古の詩集『詩経』にある「殷、命を受く、咸宜（ことごとくよろし）、百禄是れ荷う」から来ています。「咸（ことごと）く宜（よろ）し」は、すべてのことがよろしいという意味で、門下生一人ひとりの意志や個性を尊重する教育理念を塾名としたのです。全国から集った門下生数およそ５千人により、江戸時代最大規模の私塾といわれました。

淡窓は広瀬家の長男でしたが、病弱のため弟に家督継承を託し、自らの行く末を熟慮します。そのとき、学問と教育で身を立てることも重要という強い教えを恩師から与えられ、一念発起し、咸宜園の源流が始まりました。

教え方は、今でいうカリキュラムに年年歳歳、改良を重ねたものです。一人ひとりの学力を客観的に判断して席次をつける「月旦評」。規則正しい生活を実践させる「規約」。門下生に塾や寮を運営させる「職任」など、学力を引き上げ、社会性も習得させる教育を行いました。

評価のもととなる学習課程には、素読・輪読・会読など８つの「課業」、文章課題・詩課題・書会などの「試業」、面接考査である「消権（しょうごん）」がありました。

「敬天」～咸宜園でも東原庠舎でも

広瀬淡窓は「敬天」、すなわち、天を畏れ敬うことを重んじました。中国の古典『詩経』『書経』『易経』『礼経』『春秋』『楽経』の本質が敬天の思想につながると説いています。

天なるものの存在の前に、真実であること、誠実を尽くして努めること、天与の人生を充実して生きることを重んじたのです。これらは儒学の柱ともいえます。たとえば、維新の志士たちに影響を与えた儒学者・佐藤一斉も「事を為すに天を相手とせよ」の教えを残しています。その教えは「敬天愛人」を揮毫した西郷隆盛に繋がります。それは「敬は一心の主宰、万世聖学の基」とした多久聖廟の理念にも通じます。

さらに「万善簿」は淡窓が敬天思想の実践として始め、万の善を積むことを目標に、日常の行動を善行と悪行に分けて記録したものです。善行（○）から悪行（●）の数を差し引いて集計して通算します。54歳からはじめ、目標を達成したのは67歳の時といいます。

聖廟に立ち寄り、佩川に会った広瀬淡窓

淡窓は天保13年（１８４２年）61歳の時、多久聖廟にも参詣し、佐賀で草場佩川に会っています。そう多久の儒学者です。ＳＮＳ等もない時代でも、優れた学びの同志を求め、互いに切磋琢磨するために訪ね交流する。そんな交友は当時も盛んだったのです。吉田松陰も佩川を訪ね、漢詩の指導を受けたと伝えられています。

そんな多久の文化・歴史。その象徴ともいえる春季釈菜がやってきます。さあ春到来です。

（＊参考文献：咸宜園教育研究センター『広瀬淡窓と咸宜園の教育』平成22年９月刊行）

多久出身の藩医・西岡春益と佐賀の漢学者集団（三）

佐賀大学　教授　中尾友香梨

一、春益と古賀精里

古賀精里（一七五〇～一八一七）に西岡春益（一七三五～一八一三）の古稀を祝う「賀栢菴西岡国手七十序」（文化元年、一八〇四年）がある。時に精里は五十五歳、幕府の学問所昌平黌の教官として江戸にいた。文の一部をここに引用しよう。

国手は、佐嘉侯の臣たり。夙に声誉を著し、才裕かにして量（度量）宏し。未だ嘗て其の粗厲（荒く激しいさま）遽迫（気ぜわしいさま）の色（顔つき、表情）を見ず。仙算（年齢の敬称）七旬（七十）にして、壮容（壮年の容貌）有り。精神炯然（明白なさま）として、志は済物（人を救うこと）に在り。禄入（俸禄）既に優（ゆたか）なれば、善を為すも也た軽し。急（急病）に赴き苦しきを救うに、寒暑、昼夜、遠邇（遠近）、貧富を以て勤懈（勤めたり怠ったりすること）を為さず。故に其の起死回生（死にかけた者を甦らせること）の效、指もて摟く（指折って数えること）に遑あらず。（原漢文、以下同様）

「国手」とは国を医する名手という意で名医。いうまでもなくここでは栢菴こと春益を指す。春益は早くから名声を得て、才能豊かで度量の大きい人物であった。声を荒らげて激しく怒ることはなく、気ぜわしい様子を人に見せることもない。七十歳になっても衰えることなく、志は人を救うことにあり、病人がいれば寒暑、昼夜、遠近、貧富に関係なく駆けつけた。死にかけた者が春益の治療を受けて生き返った事例は数えきれないほどであるという。

続いて、精里は若かりし日、佐賀で春益らと詩社を結成していたことを回想する。

憶う、昔佐嘉に在り、諸子と詩社を結ぶを。国手は其の一なり。輪流（輪番）して主人を設け、勝景（美しい景色）佳辰（よき時節）、未だ嘗て相い徵逐（呼び合い逐い合うこと、親しく交わること）せずんばあらず。主人或いは事に礙げらるれば、輒ち国手を以て主人と作す。是を以て国手の堂居に集うこと多し。亦た其の雅度（高雅な度量）に服し、徳宇（広い度量）に庇わるるの一端なり。

社友たちは輪番で主人を務め、集いを催したが、当番の人に不都合が生じた場合は、いつも春益が代わりに主人を務めたので、結局、春益の家に集まることが多かった。これも春益の広い度量によるものであった、と精里はいう。

文の続きを見よう。

既にして余天涯に離群し、西（佐賀）を眷みて永歎す。倏忽として（たちまち）十年の間、社友後先に淪謝（逝去）して殆ど尽く。而れども国手は巋然（高大堅固のさま）たり。猶お勁松（霜雪にも凋落しない松）の姿を雪霰（雪やあられ）の中に挺して、柯葉（枝葉）の益ます繁蔚するがごとし。蓋し養を摂り道に遵いて、以て強健を致すは、其れ術為り。

精里が幕府に招かれ佐賀を離れてから、約十年の間、社友は前後して亡くなり、ほとんど残っていないが、春益は今なお強健である。それは彼が養生を怠らず、正しい道を守っているからであり、これはまさに「術」（学術）であると精里はいう。

春益と精里らが結成した詩社については、まだ詳しいことがわかっていないが、江村北海編『日本詩選続編』（安永八年、一七七九年）には、いずれも佐賀藩士である西岡瑗（西岡春益）、江友益（江上友益）、副昭賢（副島崑崙、字は士良）、成廉夫（成富廉夫、号は柳荘）、江方義（江上雪巘）と石韞玉の六人による「送古淳風遊京師　龍泰寺席上」という同題詩が一首ずつ収められており、これらはおそらく精里の京都行き（安永三年、一七七四年）の送別宴が平安山龍泰寺（現在の佐賀市赤松町）にて催された際、その席上で作られたものであろう。精里を合わせて計七人。詩社のメンバーらであったと見られる。

二、春益と横尾紫洋

横尾紫洋（一七三四～一七八四）、名は彦廉、通称は文助（文輔）、または道輔。字は孟篆、孟徵、孟瑞など。初め紫陽と号したが、のち紫洋に改める。別号に黄道符、世廉、質世なども用いた。佐賀川久保の人。父丈元は川久保邑主神代家に侍医として仕えた。

紫洋は幼少の頃、春日山高城寺に預けられて学問の蒙を啓かれ、二十歳の頃に長門国の儒者瀧鶴台に入門して徂徠学を修めた。その後、宝暦・明和年間に京都・江戸に遊学して勤王思想の影響を受ける。明和事件に関与して幕府の追跡を逃れ、明和四年（一七六七）に一旦帰国して春日山（現在の佐賀市大和町）に居を構え、教育に力を注ぐも、安永年間に再び上京し、公家や宮廷に仕えた。帰国年限を過ぎても藩の帰国命令に従わなかったため、脱藩の罪に問われ、天明四年（一七八四）に切腹を命じられた。墓は小城市芦刈町永明寺の境内にある。

『紫陽横尾文輔伝・同遺稿集』によれば、宝暦十一年（一七六一）頃、川久保邑主は学校を興して「竹裡館」と名付け、紫洋を教主とした。当時よくこの学館に集まる佐賀の七人の漢学者、つまり劉英謙・劉友益・伊孝卿・西岡栢庵（春益）・石井鶴山・副島崑崙と紫洋を、当時の人々は中国の「竹林の七賢」になぞらえて「竹裡館の七人」と称したという。

また、佐賀城下の北堀端には有志らによって「会業館」という学舎が設けられ、紫洋はここでも教えた。会業館に集う人物は、西岡拙翁（春益）、長垣（春益の子）、松隈龍意など数十名いたという。当時の藩主鍋島治茂が春益に贈った詩を一首紹介しよう。

賡西岡瑗迎黄道符韻

西岡瑗の「黄道符を迎う」の韻に賡ぐ

紫塞秋高霜満庭　紫塞　秋高く　霜庭に満つ
吟笻偶叩古林亭　吟笻　偶たま叩く　古林の亭
調同琴裡心偏赤　調べは琴裡に同じくして　心偏えに赤く
交熟樽前眼復青　交わりは樽前に熟して　眼も復た青し
漢署郎官慙作賦　漢署の郎官　賦を作るを慙じ
劉家宗室讓談経　劉家の宗室　経を談ずるを讓る
清斎為是開良会　清斎　是れが為に良会を開き
夜夜城頭燦徳星　夜々　城頭　徳星燦らかなり

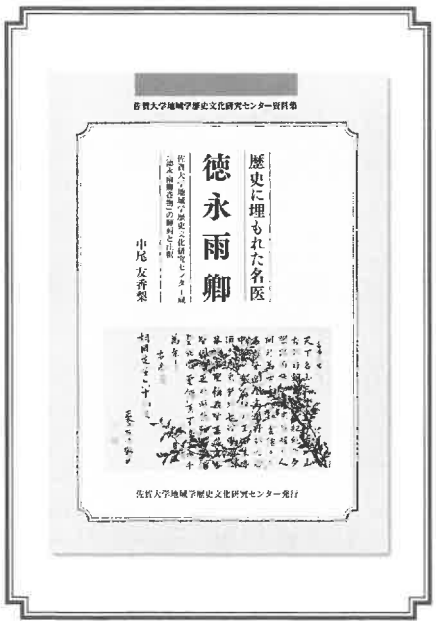
春益の「黄道符を迎う」という詩に次韻したものであり、「黄道符」とは横尾紫洋のことである。

第一句の「紫塞」は北方の辺塞、ここでは紫洋が居を構えていた春日山を指すと見られる。第二句の「吟笻」は、詩を考えながら携えて曳く杖。「古林の亭」は、紫洋の居所を言おう。第四句の「眼も復た青し」とは「青眼」のことで、好感をもつ意。第五句の「漢署」は漢の役所、「郎官」は高級文官。第六句の「劉家の宗室」とは前漢の宗室、経学者が多かった。第七句の「清斎」は清浄な室。第八句の「城頭」は城のほとり、「徳星」は景星のことで、賢人の集いをいう。

春益の詩が残っていないので、治茂の詩から推測するしかないが、春日山に居を構えていた紫洋を、春益らが佐賀城下の「会業館」に教授として迎え、そのことを詠んだ詩を春益が藩主の治茂に送ったのを踏まえ、治茂はこの詩を詠んだと考えられる。

まず首聯では、晩秋の季節、春益が春日山にある紫洋の居所を訪ねたことをいう。続いて頷聯では、琴を奏で、酒を酌み交わし、意気投合したことをいう。頸聯では、紫洋の詩文と経学が、中国古代の高級文官や学者を恥じいらせるほどレベルの高いものであることをいう。尾聯では、感銘を受けた春益が、佐賀城のほとりにあった一室に紫洋を迎え、夜々、賢人の集いを催していることをいう。

これらのことから、春益は「会業館」を立ち上げた主要メンバーの一人であり、当時の佐賀の漢学者集団の中枢にいた人物として推定できよう。



『珮川詩鈔』版木と版本が物語るもの　第１回

公益財団法人　孔子の里　評議員
多久市郷土資料館長　藤井伸幸

※この稿では木版本（版本）に対応する語句として「版木」を使いますが、「板木」とも書きます。

（一）はじめに

漢詩文といえば、高校で学んだ漢文や唐詩が頭に浮かび、加えて漢文唐詩宋詞元曲の言葉に親しんだせいもあり、日本漢文・漢詩を身近にすることはあまりありませんでした。しかし、当館に勤務し、平成29～30年に開催した「草場佩川」展に関わることになり、思いがけず『珮川詩鈔』（草場佩川著）の版木と版本を手にすることになりました。今回ここに紹介するのは、その成果を基にしたものです。

※珮川詩鈔の「珮」は後年の号「佩」と異なり王偏です。

（二）木版印刷の概要

本論に入る前に、版木と版本について少しお話します。これらの言葉は木版印刷に関わる言葉で、版木は木の板に文字や絵を鏡文字状に陽刻または陰刻したものです。この木版に墨や顔料を塗り、紙を当てて、馬簾（ばれん）で摺って製本したものを版本といいます。今日では、研究者以外はあまり使用しませんが、平安・鎌倉・室町時代には主に経典など仏教関係の著作に木版印刷が使用され（写本もありますが）、江戸時代には仏典、漢籍、国書そして地図や浮世絵などの出版にも盛んに用いられました。

※江戸時代の木版による出版の様子は『的中地本問屋（あたりやしたじほんといや）』「十遍舎一九」などの絵を参考にすると分かりやすく理解できます。

（三）『珮川詩鈔』版木の種類と頁の割付

当館には、平成六年七月二十一日に京都市の草場建彦氏から寄贈された『珮川詩鈔』の版木があり、『船山遺稿』の版木も寄贈されています。寄贈された『珮川詩鈔』の版木は合計38枚あります。現在、上の写真のように収蔵庫に保管しています。

版木の寸法により次の４種類に分けられます。

1　横約70～71cm　縦約19～20cm　厚約1～2cm　32枚　この種類の版木は『珮川詩鈔』の本文に使用

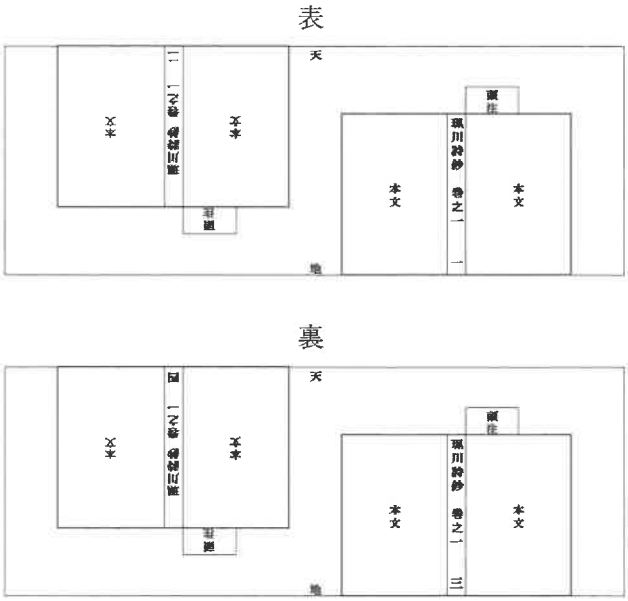
2　横約37～39cm　縦約18～19cm　厚約1～2cm　4枚　この種類の版木は『珮川詩鈔』の序文と跋文に使用

3　横約19cm　縦約20cm　厚約1～1.5cm　1枚　これは表紙の題箋及び表紙見返しの内題に使用

4　横4.3～4.4cm　縦6.3～6.4cm　厚1.7～2.0cm　1枚　これは周囲の枠線（匡郭）と縦の罫線（界線）のみが彫られ原稿用紙に使用と推定

1と2について、版木に厚みの幅が最大1cmあるのは、版木の両端と中央部の厚みの差によるもので、版木の両端は版木の元の厚みが残り、版木の中央は印刷頁単位の境で通常深く彫っています。

1の本文を彫った版木一枚分の両面を模式図に描けば次のようになります。



図の上段右下に一丁分（真中で折り曲げて製本するので今日でいう2頁分）、左上にも一丁分を彫り込んでいる（本文の天地逆）ので、版木1枚のこの面で合計4頁が印刷されます。この版木の裏面も同様に掘り込みがなされているので、版木1枚両面で四丁分の合計8頁分が印刷できます。

ところで、版木に彫られた頁番号は、版木の天地をそのままにして見ていくと、1枚目（右から左へ表一二裏三四）、2枚目（同様に表五六裏八七）、3枚目（同様に表九十裏十二十一）、4枚目（同様に表十三十四裏十五十六）と進み、1枚目の並びは4枚目と同じ、2枚目の並びは3枚目と同じというような繰り返しになっており、この並びで『珮川詩鈔』

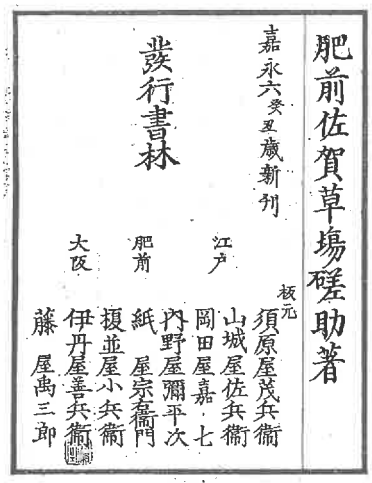
の巻之一が終わります。何故このような並びで彫られているのか、製本の関係かと考えましたが、よく分かりません。実は、続く巻之二、巻之三、巻之四の頁の割り付けは巻之一とは異なり、事情は更に複雑なようです。

(四) 伝わらなかった版木

(三) で書いたように、当館に寄贈された版木は38枚ありますが、このうち『珮川詩鈔』の表表紙から裏表紙までに関わる版木は37枚です。『珮川詩鈔』の印刷に実際に使用されたと考えられますが、それはそれなりの証明が必要で、この件については次回以降に紹介します。ただ、寄贈された『珮川詩鈔』の版木と版本を比較した結果、一頁分足りない版木があることが判りました。それは、裏表紙の見返しの部分で、かつては存在し、印刷にも使用されたはずですが、寄贈された草場家には何らかの事情で伝わらなかったのでしょう（後述）。

次の写真は『珮川詩鈔』巻之四の裏表紙見返しの奥書にある刊記です。

板元（はんもと）の名称が併記されていますが、


肥前佐賀草場磋助著
嘉永六癸丑歳新刊
發行書林
江戸
肥前
大阪
板元
須原屋茂兵衛
山城屋佐兵衛
岡田屋嘉七
内野屋彌平次
紙屋宗衛門
榎並屋小兵衛
伊丹屋善兵衛
藤屋禹三郎

個人蔵

須原屋、山城屋、岡田屋、内野屋は江戸、榎並屋、伊丹屋、藤屋は大阪の有名な板元ですが、そこに肥前紙屋宗右衛門の名があります。この板元を詳解する資料はありませんが、安政二（1855）年に再板刊行された『大成四書字引』の奥書に肥前佐賀白山町紙屋宗右衛門と記載がありますので、少なくとも幕末期には活動した佐賀の本屋だったことが分かります。

※紙屋惣右衛門の名称は18世紀後半まで遡ります。

江戸時代の出版に関する権限は板元が持っていましたので、著作者である草場佩川に版木を自由に処理する権利はなく、『珮川詩鈔』の版木が後年、草場家の手に移った際に、いわば板権を宣言したような奥書を彫った版木は、板元に留まったか或いは板元で処分されたか等が推測されます。

※板元が全部入れ替われば、刊記記載の板木は新調され、次の板権所有者には伝わらないと考えられます。

肥前佐賀草場磋助著　「磋助」は草場佩川の通称で「瑳助」とも書きます。

嘉永六癸丑歳新刊　嘉永六癸丑（みずのとうし）歳（とし）に初版が刊行されました。

發行書林　発行する本屋です。

板元　出版や販売などの権利をもつ本屋で、『珮川詩鈔』の刊行では、八軒の板元による相合版（あいあいばん）になっています。

(五)『珮川詩鈔』刊行の年と月

(四) で示しましたが、『珮川詩鈔』は嘉永六（1853）年に刊行されたことが奥書により分かります。草場廉夫（佩川の子である船山）の例言によれば「家君は今年六十三歳で詩を賦することおおよそ一万五千餘首…この編に抜き書きしたのは僅かに六百首で十八歳から五十三歳までのもの…（嘉永己酉1849）」と記していますから、『珮川詩鈔』刊行の四年以上前から準備されていたこともわかります。初版刊行年の嘉永六年といえば、アメリカのペリーが旧暦六月に浦賀へ来航しています。黒船来航で日本が騒然としていた時期に刊行されたと推定されますが、黒船来航の前後どちらだったのでしょうか。

このことに関し、版木を調べる中で、巻之二の最後の頁（二十九三十）と巻之一例言を彫った版木の余白（版木を四分割した最後の部分）に、墨書された次のような資料を見つけました。

嘉永丑六までは奥書と同じ年号ですが、「稲月」との記載があります。稲は秋のことですから、旧暦の七～九月にあたり、『珮川詩鈔』の刊行はペリーが浦賀を去った後のこと（もっともペリーは翌年に再来日します）と考えられます。（続く）

多久家文書
『水江事略』（翻刻文）紹介　5

長信公譜二　永禄元年戊午ヨリ　同年十二年己巳ニ至ル

水江事略巻之二　長信公譜之二（下）

長信公多久城ニ在テ群臣ヲ集メテ仰ラルヽハ我此城ヲ守元ヨリ恐ルヽニ足サルナリ去ナカラ國中未平均セス其上當城ハ南ニ有馬平井後藤アリ西ニ伊萬里山代大河野アリ北ニ波田松浦鶴田アリ彼等ハ皆武ヲ嗜ミ勇ヲ勵ミ威名東西ニ隠レナシ元ヨリ近隣ナレハ能當城ノ渕底ヲ諳シ覺此城ヲ侵シ奪ハン事ヲ謀ル輩ナリ其大敵ノ中ニ挾マレ是ヲ制セン事如何ナル術カアルト仰ケレハ満座暫ク兎角ノ諾ナシ時ニ土橋式部（**山内ノ首長十人ノ随一**）末座ヨリ進ミ出テ曰ク君御懸念有ヘカラス縦令三方ノ大軍攻来ルトモ群臣必死ノ鋒ヲ揃ヘ敵ヲ要害險阻ノ處ニ迎ヘ撃ツモノナラハ御勝利アラン事踵ヲメグラスベカラス某物ノ数ニモ候ハネド土橋ニ在テ北境ヲ守リ候ヘハ松浦口ニ於テハ何ノ恐レカアラン此上ハ君當城ヲ枕ニセント御決心アラハ群臣トシテ誰カ死ヲ顧ミンヤト云此時群臣一同土橋カ申条允ナリト同シケレハ長信公御機嫌美ハシク心地ヨシ其方カ言葉我元ヨリ左コソ存スルナリ弥堅固ニ城ヲ守リ南北ノ敵ニ當ルベシト仰ケレハ群臣一同誓ヲ立テ益々御下知ニ従フ是土橋カ一言ニ因ル君臣一致ニ必死ノ胸ヲ堅メケリ此故ニ長信公式部ヲ擧テ家臣ノ列ニ加ヘラル爰ニ樋口大炊助ト云モノ東原村ニ住ス後年敵ニ組シテ長信公ニ叛ク公討手ノ者ヲ誰渠ト御吟味アリシカハ式部某ニ仰付ラレカシト直ニ東原ニ向ヒ不日ニ大炊ヲ討捕テ首ヲ實撿ニ備フ公其功ヲ賞セラレ則東原ヲ式部ニ下サル土橋小侍東原合セテ廿余町式部カ拝領地ナリ

（式部初ハ尾田氏）

同六年癸亥　長信御年二十六

多久御在城ナリ

安順公水江東ノ舘ニテ御誕生ナリ御幼名彦仁王御母ハ芳岩夫人時ニ御年十八

隆信公鍋嶋清房及ヒ母公慶闇尼ト御相談ノ上鍋嶋左衛門太輔信昌公ヲ以テ長信公ノ御輔佐トシテ多久ニ遣ハサル

初信昌公ハ胤連ノ養子ト成テ晴氣ニ在ル事數年胤連實子出生ニ依テ固ク辞シテ佐嘉ニ歸ル胤連皆木分三十町家臣拾餘人ヲ信昌公ニ附属ス信昌公中比飛驒守信生ト号シ後加賀守直茂公ト改メラル日峯ト称奉ル是ナリ

同七年甲子　長信公御年二十七

多久御在城

二月隆公平井經治ト横邊田ニテ御合戦御勝利アリ進テ須古ノ城ニ寄セラル鍋嶋信昌公御先鋒ナリ後扱ヒニナリ和平有テ須古城ノ郭只々土手ヲ崩サル

或説ニ今年長信公多久城ニ入ルトモ

泰巖公譜　永禄七年長信多久宗時カ梶峯ノ城ヲ功落ス公長信ヲシテ是ヲ守ラシムト

同八年乙丑　長信公御年二十八

多久御在城隆公モ御越アリ

同九年丙寅　長信公御年二十九

春夏ノ比隆公多久ニ来リ使ヲ上松浦ニ遣ハサレ波多下野守鎮草野中務太輔鎮永等多久ニ来聘スルヘキ旨ヲ仰越サル勝屋勝一軒（**心月齊中國ノ士**）御使タリ来聘事終リ隆公佐嘉ニ御歸城

同十一年戊辰　長信公御年三十一

隆公小田鎮光（**弾正少弼**）ト御和平成ル鎮光隆信ノ御婿ト成テ蓮池ニ歸ル

今年隆公鎮光ヲ多久城ニ遣ハサレ我公ヲ蓮池城ニ移サル

鎮光妻子家臣ヲ率テ多久城ニ入ル

鎮光ノ室（**静室**）實ハ竜造寺胤榮ノ息女ニシテ隆信御子トシテ遣ハサル又隆公ノ御三男鶴仁王君ヲモ鎮光ノ御子トシテ遣ハサル後善次郎家信ト号シ後藤貴明ノ家ヲ嗣セラル長信公多久城ヲ御渡シ有テ蓮池ノ城ニ入ラル

相浦右衛門佐蓮池ニ従ハン事ヲ請フ隆公鍋嶋信昌公ヲシテ御差留有テ仰セラルヽハ苗字ノ地ヲ離レ他方ニ移ラン事誠ニ不便ノ次第ナリ深キ所存モアレハ只在所ニ留ルヘシトナリ相浦詮方ナク在所ニ留ル土橋等カ輩モ同様ノ仰ニ依テ在所ニアリ公士卒ヲ将ヒテ蓮池ニ御在城アリ鎮光ハ多久城ニ居テ心ニ快トセス相浦土橋以下地士ノ人質ヲ城中ニ入レテ當庄ヲ守ル

同十二年己巳　長信公御年三十二

扨モ隆公近年國中東西ヲ伐平ケ御武威日ヲ遂テサカナリシカハ豫テ大友ニ味方セシ國中ノ者共此事ヲ豊後ニ告ケテ頻リニ援兵ヲ請フ

大友左衛門尉義鎮入道宗麟肥前國中味方ノ輩ヨリノ注進ヲ聞キサラハ龍造寺ヲ伐平ケント分國六州ノ兵六萬餘騎ヲ引率シテ高良山ニ出張ス戸次伯耆守鑑連吉弘左近太輔鑑速臼杵越中守鑑理ノ三老臣ヲ先陣ノ将トシ軍ヲ三手ニ分チ其一軍ハ東肥前あ祢境原ニ陣シ一軍ハ北ノ方河上水上ニ陣シ一軍ハ西ノ方小城表ニ発向ス肥後豊後筑後肥前ノ輩各手勢ヲ率ヒテ相従フ筑後柳川ノ城主蒲池宗雪（**武蔵守鑑盛**）同國高尾ノ城主田尻親種父子（**伯耆守親種丹後守鑑種**）及ヒ牟田豊饒安武等兵ヲ率ヒ江ヲ越テ神埼ニ入リ國中大友一味ノ輩ニハ馬場筑亂宗横岳江上神代小田犬塚高木姉川等其頭分ナリ西肥前ハ有馬仙岩ヲ大将トシテ高来彼杵松浦上下モ杵嶋藤津等ノ郡士大半是ニ属ス

龍公小田鎮光カ敵方ニ組シ多久ヲ出テ本城蓮池ニ討入□□ノ結構ヲ聞召サレ預メ此事ヲ長公ニ仰越サレ御油断有ヘカラストノ御状左ニ載ス

鎮光豊州陣之様近日被罷越之由到来候就夫弥蓮池書之義無緩専一ニ候我等内意等成氏江申候彼者ニ以面細砕可有入魂候明日普請人足之義是又申付候堀之義可然在

所等見合可被申付候条端不可有油断候不及申候かしく
返々今度弓箭之義御防戦之義ハ不及申候于今ハ氣根にて可為勝利之由存候相構て繰り構てく
不氣根にてハ不可有曲候かしく
龍山　信
長信　参
かしく

三月晦日豊後衆北ノ方五領長瀬高木邊ニ攻来ル神代長良按内者タリ放火シテ諸村ノ人家ヲ焼拂フ爰ニ於テ鍋嶋信昌公及其属士拾七騎突出テ多布施神野道祖ノ邊ニ防キ眼ニ餘ル大敵ヲ破討テ植木邊ニ至ル討捕者五百余人疵ヲ被ル者数ヲ知ラス凱声ヲ発シテ城ニ入ル此挙ハ信昌公一手ノ御戦功ニシテ城中挙テ是ヲ称ス毛利右馬頭元就ノ二子吉川駿河守元春小早川隆景ノ軍勢東肥前ニ来リ基肆養父ノ邊ニ陣ス是ハ兼テ約諾ニ依テ隆公ヲ救ハンタメナリ隆公御書ヲ長公ニ遣ハサレ此事ヲ仰越サル其状ニ云

此節之弓箭不及申候
一爰元地盤無緩候可御心安候
一昨日豊州衆懸候之条即時に逐一防戦敵
五百餘討取候其儘一人も不罷下候又取懸候共勝利必
呈と存候辻ハ鑓迄と存候
一芸州衆基肆養父表へ被取出之由難到来候
于今ハ是ハ不入候其元無緩覚悟専一ニ候
恐々謹言
四ノ二　隆信
返於く五日御侍下之重畳吉左右可申候
長信参
かしく

四月上旬豊後ノ諸将長瀬ノ宮ニ本陣ヲ居ヘ龍造寺ニ對陣ス同中旬大友龍造寺ト和平成ル三老及ヒ諸軍退散シテ筑前ニ行ク是ハ毛利ノ大軍立花ノ城ヲ囲ム故ナリトソ秋冬ノ比大友宗麟ノ一族八郎親貞當國ノ押ヘトシテ来陣ス

親貞或ハ晴榮ニ作ル或ハ大友八郎ハ宗麟ノ弟ニシテ宗像ト号ストモ云又一説ニハ菊池八郎親貞ハ宗麟ノ甥ナリトモ云一説ニハ親貞一方ノ大将トシテ春ヨリ在陣ストモ

冬十二月長信公御使ヲ大友親貞ニ遣ハサレ平均ヲ賀セラル親貞ヨリノ禮状アリ佐ニ載ス

未申通候之處今度為和睦之至祝御使節
尤以珍重　候殊ニ太刀鐵筋御懇情畏祝此事ニ候
弥於向後無愀変可啓承候仍而太刀一腰御虎
一、令遣覧之候寔補御祝意計ニ候猶期來
音之時候恐々謹言
十二月十三日　親貞　判在
長信参
御辺服

◆ 賛助会員入会の案内 ◆

本法人では、重要文化財多久聖廟及びその周辺に所在する史跡等の保全とすぐれた自然条件との調和のとれた開発を推進し、快適な環境の醸成と、由緒ある文教の地に適応した学芸文化の研鑽振興及び普及を図り、もって地域の活力ある発展に寄与することを目的として活動をしています。
ご賛同いただき、ご入会ご協力をお願い致します。

- **会員の種類**
  個人賛助会員　年会費　一口　３，０００円
  法人賛助会員　年会費　一口　１０，０００円
- **入会申込み・お問い合わせ**
  〒846-0031　多久市多久町1843番地３　東原庠舎内
  公益財団法人 孔子の里 事務局
  電話　0952-75-5112　FAX　0952-75-5320
  E-mail　ko-si@po.taku.ne.jp　孔子の里　検索
  詳細は当財団ホームページをご覧下さい。

多久聖廟　春季釈菜のご案内

日時　令和２年４月18日（土）　10時30分～12時10分　　**場所**　多久聖廟

執事・怜人 入場　10時～10時20分（聖廟内）
献官・祭官 入場　10時20分～10時30分（聖廟内）
① 釈菜（せきさい）　10時30分～11時30分（聖廟内）
~~② 釈菜の舞　11時30分～11時45分（聖廟境内）~~　中止
~~③ 参列生徒の唱歌　11時45分～11時50分（聖廟境内）~~　中止
~~④ 揚琴の調べ　11時50分～12時（聖廟境内）~~　中止
~~⑤ 孔子の里腰鼓　12時～12時10分（仰高門前）~~　中止
~~お呈茶　10時～14時（東原庠舎）~~　中止

※諸事情により予定を変更する場合がございますので、あらかじめご了承願います。

第二十二回 全国ふるさと漢詩コンテスト

令和元年十二月八日（日曜）

公開講座　演題

『草場佩川と文人との交流-北部九州を中心に-』

講師　吉田　洋一 氏

（久留米大学文学部教授）

令和元年十二月八日（日）、「第二十二回全国ふるさと漢詩コンテスト」の表彰式が行われた。

江戸時代の邑校東原庠舎で学ばれていた古典や漢学に親しんでもらおうと始まったコンテストも二十二回目を迎え、日本国内の漢詩大会の中でも指折りのコンテストとなってきました。

今回は「廟、寺、祠（神社）」をテーマに公募され、国内二百六十五点、海外から三点の計二百六十八点の作品が集まり、石川忠久先生と佐藤保先生（お茶の水女子大学名誉教授）に審査いただき、最優秀賞に神奈川県の小嶋明紀子さんの『多久聖廟』が選ばれました。

小嶋さんの作品は聖廟展示館敷地内に詩文を陶板に刻んだ石碑が建立され除幕式が行われました。

最優秀賞

多久聖廟

神奈川県藤沢市　小嶋明紀子

韶樂今猶奏廟堂
一山碧樹自清涼
淳風千載因賢守
人謂恰如鄒魯鄉

韶樂　今猶ほ　廟堂に奏す
一山の碧樹　自ら清涼たり
淳風　千載　賢守に因る
人は謂ふ　恰かも鄒魯の鄉の如しと

優秀賞

東林寺

茨城県土浦市　菅井　和子

山寺青松歲月遙
遠公遺跡慕高標
虎溪三笑當年事
賽客怡過新石橋

山寺の青松　歲月遙かなり
遠公の遺跡　高標を慕う
虎溪三笑　当年の事
賽客　怡び過ぐ　新石橋

優秀賞

古寺喫茶

埼玉県鴻巣市　池上　一利

雨後幽溪通古龕
如潮緑樹繞茅庵
老僧時説盧仝訓
七碗清茶苦亦甘

雨後の幽蹊　古龕に通ず
潮の如き緑樹　茅庵を繞る
老僧　時に説く　盧仝の訓
七碗の清茶　苦亦た甘し

入選

高野山御廟

愛知県弥富市　古田　茂

老杉翁鬱晝猶昏
廿萬墳塋儼此存
紺殿清輝長不滅
大師遺德遍乾坤

老杉　翁鬱　昼猶お昏し
廿万の墳塋　儼として　此に存す
紺殿の清輝　長えに滅せず
大師の遺德　乾坤に遍ねし

入選

慈恩寺を尋ぬ

埼玉県春日部市　井波　彬訓

紅雲靉靆夕陽傾
古刹曳笻清気凝
靈骨奉安玄奘塔
肅然仰望十三層

紅雲　靉靆として夕陽傾き
古刹　笻を曳けば清気凝る
靈骨奉安す　玄奘塔
肅然として　仰望す十三層

入選

湯島聖堂を訪う

徳島県阿南市　田中　公

一歩入門清謐盈
不疑此地往時黌
楷風樹蔭頓尊像
應聽儒家講讀聲

一歩門に入って　清謐盈つ
疑わず此の地往時の黌なるを
楷風の樹蔭　尊像に頓すれば
応に聴くべし　儒家講読の声

奨励賞

中尊寺

佐賀県佐賀市　副島　陽子

奥州天地洛陽風
史跡幾多圖畫中
大願不知英傑夢
燦然金色古今同

奥州の天地　洛陽の風
史跡幾多　図画の中
大願知らず　英傑の夢
燦然たる金色　古今同じ

（左から、渡辺桜眞様、横尾俊彦、小嶋明紀子様（最優秀賞受賞者）、宮本英尚様（公益財団法人斯文会役員）、吉田洋一様（久留米大学文学部教授）、田原優子

肥前国多久邑八景詩紹介（其の七）

山下村煙

村落無為風俗淳
飛霞薄霧報昏晨
農歌比屋道堯舜
萬竈炊煙安樂民

村落無為ニシテ　風俗淳ナリ
飛霞薄霧　昏晨ヲ報ズ
農歌屋ヲ比ベ　堯舜ヲ道フ
萬竈ノ炊煙　安樂ノ民

諸官快堂　林信允士信甫

山下村煙

徒倚楼台上
青山夕日斜
唯看煙起処
知是有人家

楼台ノ上ニ徒倚スレバ
青山　夕日斜ナリ
唯ダ看ル　煙ノ起ル処ヲ
知ル是レ人家有ルヲ

経筵講官　林信智艸

第4回 多久百景 写真コンテストのご案内

～あなたの写真が多久百景に～
（毎年二十景・５年間で百景を認定します）

テ ー マ　多久の四季・伝統文化・歴史
応募期間　2020年５月１日～７月31日
応 募 料　無料
応募条件　多久市内で撮られた写真に限定
グランプリ賞金　10万円

詳しくは当財団HPをご覧いただくか、下記の問い合わせ先までご連絡ください。

問い合わせ先　公益財団法人 孔子の里
「多久百景 写真コンテスト」係
電話 0952-75-5112

孔子の里　検索

第3回 多久百景 写真コンテスト入賞作品

特別賞

新緑♡の棚田

特別賞

くど造り民家のある光景

第二十五回 多久市論語カルタ大会入賞者

十一月二十三日（土・祝）、第二十五回多久市論語カルタ大会が東原庠舎東部校体育館で開催されました。

百二十四名が参加し、論語カルタの札を取る子供たちの声や応援の保護者の方たちの声援が会場いっぱいに響き渡りました。

入賞者は次のとおりです。

【幼稚園・保育園の部】
・優勝　陣内　彪琉（こばと保育園）
・準優勝　服部　創真（こばと保育園）
・三位　馬場　音羽（こばと保育園）

【小学一年生の部】
・優勝　吉田淳一郎（中央校）
・準優勝　寳藏寺姫華（中央校）
・三位　松永　蓮和（東部校）

【小学二年生の部】
・優勝　山田　紋夢（東部校）
・準優勝　吉牟田結心（東部校）
・三位　西山　心夏（東部校）

【小学三年生の部】
・優勝　北島　瑞己（中央校）
・準優勝　村川虎太郎（中央校）
・三位　西山　柚咲（中央校）

【小学四年生の部】
・優勝　吉田　凜音（中央校）
・準優勝　北島　拓実（東部校）
・三位　渡邊　星那（東部校）

【小学五年生の部】
・優勝　山田　結衣（東部校）
・準優勝　秋永　乃愛（東部校）
・三位　徳島　唯（東部校）

【小学六年生の部】
・優勝　中谷　侑樹（東部校）
・準優勝　北島　薫（東部校）
・三位　広橋　華恵（東部校）

【中学一年生の部】
・優勝　野田　祐真（東部校）
・準優勝　川原さくら（東部校）
・三位　田代　渚咲（東部校）

【中学二・三年生の部】
・優勝　荒島　陽菜（東部校）
・準優勝　徳重こと李（致遠館）
・四位　梶原　唯（西渓校）

【高校・一般の部】
・優勝　廣川　賢仁（文科系男子）
・準優勝　桃崎　珠奈
中里　晴佳（チームはるたま）
・三位　圓城寺沙紀
田久保真希（チーム東部）

《儒林》

東原庠舎初代教授
河浪自安（かわなみじあん）（１６３５～１７１９）

姓は菅原氏河浪、諱は道忠、字信甫、小字松千代丸、交名忠兵衛、号自安、又号梅穏（佐賀城下勢屯町の旧宅の庭前に梅を植えてその木を大切にしていたので、多久四代領主茂文公より自書による「梅穏」（梅陰と書いた書物もある。）の額を賜ったので、梅穏の号を用いる。）

父の諱は安純、交名所兵衛。母は徳永氏。寛永十二年（１６３５）正月六日に、肥前佐嘉郡八戸村に生まれる。

父が中小路に転居、その後再び鹿子村に転居したので、慶闇寺七世の輪和和尚に学ぶ。

明暦三年（１６５７）、二十二歳の時、父安純の命により、松永宗雲氏に醫術を学ぶ。

寛文元年（１６６１）、二十七歳、東武（江戸）に遊学し吉田法印の門下となり、命師・碩学を訪ね、倫道（人の踏み行うべき道）を学び、寛文五年（１６６５）、三十一歳で国へ帰り、医学と儒学をもって多久三代領主多久茂矩に仕える。

佐嘉城下勢屯町に居を構え、賀茂氏の娘を娶る。子が無く、野田俊信の二男道義を嗣と為す。

元禄五年（１６９２）、自安五十八歳の時、四代領主多久茂文の命で多久に転居し、暫くの間、本町に住む。

元禄十二年（１６９９）、東原学宮が落成し、東原精舎の教授となり、多久聖廟の創建に尽力した。子弟を教育するにあたっては「小学」を基本とした。学ぶ者は益々多くなった。禄百石を賜った。

享保十三年秋、病に罹り、鶴田精・尾形惟重を招き、「先君茂文公　篤く道学（程朱学）を好み、聖堂・学校を創造し、道を以て本と為す、邑の民皆悦んで多久の民たらんことを願ふ、先君の基業、後生或は廃壊せんことを恐る。吾、常に以て憂いと為す。今、死に臨んで其の憂い益深し。意ふに、室老安誠（多久安誠）、志を道学に励まし、行ふ者は、惟ふに安誠のみ。且つ之が助けを為し、先君の基業をして興隆せしむる者は、二子（鶴田精・尾形惟重）其の任なり、道学は国家を治むるの本たり、伏して冀くは、先君の志を継ぎ、今、主を輔け、以て其の事を述べよ」と遺言したと伝えられる。多久聖廟の北側・東の原松山墓地に葬られる。

これまで、自安先生の生涯や業績については、右記のように要約されている。

昭和五十年（１９７５）墓地改葬の時に墓誌が出土した。改葬に立ち会った、聖光寺住職の野中寛應師は、『墓石の下一メートル位の所に墓誌が納められてあり、さらにその下に四囲に列石を廻らせ、木棺が埋められていた。木棺は腐食しており、中には自安先生の頭骨が認められた。石組の隣には石蓋をした直径六十センチメートル位の甕棺があった。』と往時を回顧する。

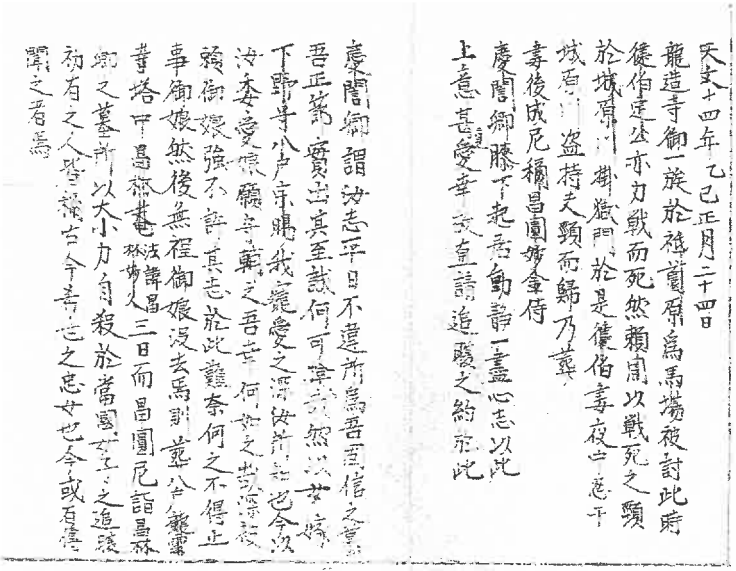
自安先生のお墓は聖光寺境内に移設されている。墓誌（聖光寺所有）は多久市重要文化財に指定され、多久市郷土資料館に寄託されている。

自安先生の墓碑

多久市郷土資料館所蔵の『多久諸家系図・巻二』の河浪氏系圖は、文化八年（１８１１）辛未六月に、時の戸主、河浪忠兵衛道賢が邑主に差出した系図で、天文十四年（１５４５）からの事柄が記されている。

しかし、多久城下は、延宝五年（一六七七）の『水江事略』の記事によると、「長信公ヨリ初マレリ然ル所中比火災ニテ諸士ノ家残ル所ナク焼失セシニヨリ・・・」とあり、当初からの記録の写し書きではなく、言い伝えや記憶にある事柄を取り纏めたもので、信憑性は定かでない文書である。と考えられる。

河浪家の初代と思われる「菅原某」から「道忠（自安先生）」までの記録。そして、自安の養子となった「道義」から、この系図が書かれた文化八年



河浪氏系図（部分）

（1811）六月までが残されている。

河浪氏系図　ほかに川浪と書くこともある

菅原某

通称、諱は伝わらず、戒名は徒伯定公。

天文十四年乙己正月二十四日、竜造寺一族、祇園原に於て、馬場に討たれる。

この時、徒伯定公も力戦したが死す。

然るに頼周は、戦死者の首を城原川に於て獄門に掛けた。

是に於て、徒伯の妻は夜中に城原川に忍び、夫の首を盗み、持ち帰り、葬った。

妻は後に尼となり、昌圓妙金と称した。

昌圓尼は、慶闇卿の膝元に仕え、その日常生活の世話に、心を尽くした。

これにより、慶闇卿は甚だ彼女を寵愛した。

ゆえに、昌圓尼は追腹の誓約を願い出た。

そこで、慶闇卿は言った。

「お前の志は、日頃から行いに背かないので、私はもちろんその志を信じる。

私を慕う正しい節（みさお）は、実にその至誠より出たものであり、どうして奪うことができようか。

しかし、私は娘を下野守八戸宗暘に嫁がせており、私が娘を深く愛していることは、お前のよく知っているところである。

今、お前を愛娘に委ね、彼女を守ってくれることを願う。

そうしてもらえたら、私はどんなに幸せだろう。」

こうして深く御娘のことを頼まれ、追腹の志を認めなかった。

そこで、どうしようもなく、やむを得ず、愛娘に仕えた。

しかし、それからほどなくして、慶闇卿の娘はこの世を去った。

八戸龍雲寺の塔中、昌林庵に葬った。（戒名は昌林妙久）

三日して昌圓尼は昌林卿の墓所に詣で、大小の刀で自殺した。

当国に於て、女子の追腹は、初めてのことなので、人々は古今の世に珍しい忠女であると称えた。

今もたまにこのことを言い伝える人がいる。

道純

号は久純齊　純の字は順と書くこともある。

戒名は一安

諱を久純、号を久順齊とする説もあるが、ほかにもとづく資料がない。

天正十五年（1587）家晴公（龍造寺家晴・諫早家の祖・竜造寺長信の兄）は、諫早を所領し、御印を賜って、湯江村（北高来郡湯江町）を知行所とした。しかし、昌圓尼が慶闇卿に忠節を尽くしたので、長信公より召された。

久純はこの時に多久の御家を出て、佐嘉に住んだ。

寛永十二年（1635）乙亥三月二十八日に亡くなった。

妻は倉町市左衛門の娘なり。

戒名は清雲妙光。

安純　母は倉町氏

通称は所兵衛、戒名は無参道有。実は副島太郎兵衛の四男であるが、久純の養子となった。

長信公及び息子、孫の三代に仕えた。

天正十八年（1590）片田江に生まれ、八戸村に住んだが、長年が経ってから、水江大崎に転居した。

寛文二年（1662）四月四日に大崎の家にて亡くなった。

享年七十三歳だった。

妻は徳永仁左衛門の娘である。

戒名は雲鏡妙紫である。

慶長二年（1597）に生まれ、貞享三（1686）丙寅七月七日に、勢屯町の家にて亡くなった。

享年九十歳であった。

心田村良

妾腹。出家して、水江圓蔵院に住む。

寛文九年（1669）巳酉二月二日、故有りて、八戸天福院にて亡くなる。

女子

戒名は守信紹智。

延宝七年（1679）己未十月七日

川久保松阪館内にて亡くなる。

某

権左衛門。戒名は江雲浄天。

某年六月二十九日に没す。

今の川浪兵太夫の先祖。

雲鏡は始め河原源兵衛に嫁いで、守信および権左衛門を生んだ。

安純に再嫁する時、安純はその二子を連れて来させた。

女子　母は徳永氏
戒名は香蓮妙清。
梶原安右衛門順時に嫁ぐ。
享保二年（１７１７）酉三月十九日に亡くなる。
享年九十三歳であった。

道忠　母は徳永氏
字は信甫、小字は松千代丸。
通称は忠兵衛。
号は自安、また梅陰と号する。
寛永十二年（１６３５）正月六日、八戸村の宅にて生まれる。
幼くして、父安純に従って前記の場所に引っ越す。
成長して江戸に遊学し、医術を学んだ。
帰国して茂矩公に仕えた。
勢屯町に住み、若干の禄を賜った。
その後、茂文公に仕えた。
儒術を以て、寵愛を受け、知行所として、下多久村牟田辺を与えられ、さらに加えて志久村も賜った。
実に、元禄五年（１６９２）四月二十日、道忠、五十八歳の時だった。
居を多久に移して、暫く本町に住む。
元禄十二年（１６９９）東原学宮が完成すると、東原精舎に移って、教授となる。
享保四年（１７１９）己亥三月十三日に亡くなる。
享年八十五歳であった。

妻は加茂茂次左衛門の娘。
小字は万、諱は敬質、字は伯誠。
享保十七年（１７３２）壬子七月二十八日に亡くなる。享年は七十六歳だった。

以上が「河浪氏系図」の家祖「河浪某」から「道忠」（河浪自安）までに付されている記載事項である。
「菅原某」の記事にある、天文十四年（１５４５）、祇園原で戦死した龍造寺の武将は、六郎次郎周家（戒名・鼎伯周公）、三郎家康（戒名・安祥道恭）、孫八郎頼純（戒名・傑崇哉英）、の三名である。
戒名徒伯定公の名を確認することはできない。
家臣では、福地右衛門尉家盈、福地新右衛門、福地善八郎、百武藤次左衛門、野田河内守、野田謙書記、江副又八郎、西山小三郎、下村源八郎、大塚左兵衛、大塚市之丞、石井左衛門、多比良大炊助、の十四名が討ち死にしているが、家臣たちの戒名は不明である。
しかし戒名に定公とある事から龍造寺の惣領職にあった人物と推測することができる。
徒伯定公の妻である昌圓妙金の戒名も、龍造寺氏の系図や系譜に見つけることはできない。
慶闇卿は慶闇尼のことで、村中龍造寺家の当主であった龍造寺胤和の長女で、周家に嫁ぎ、龍造寺隆信・長信の母親。娘は八戸宗暘に嫁いだ昌林妙久がいる。慶闇尼は、後に鍋島清房に再嫁して鍋島直茂の義母となっている。

「道純」諱は久純、または久順。
無據（よんどころなし）、他にもとずく資料が無い。と書いているが、妻倉町市左衛門之娘戒名清雲妙光を調べると、倉町市左衛門信俊は龍造寺家の家臣。
天正十二年（１５８４）、沖田畷の戦で龍造寺隆信と共に戦死をしている。
妻は龍造寺隆信の娘。子孫は倉町鍋島家。
さらに系図で、龍造寺又八郎久純（久重）に行き着いた。

龍造寺又八郎久純については、『水江事略系図』に、家門の長女が下総守康房の母とあり、康房が純家の家督を継いでいる。
また、康房の年譜、天正五年の項に、『天理君養米倉六郎太郎種次之女妻兒久重』。
さらに、久重の項には、『龍造寺又八郎。一名、久純。童名、彦市丸、中、孫四郎。文禄元年六月十五日卒、朝鮮熊川、齢二十五。室　天理君養女神嵜米倉六郎太郎種次長女芳岩夫人之姪也。』
康房は、芳岩夫人の姪と幼児の久重（久純）を養子としている。
久純は文禄元年（１５９２）、文禄の役の時に二十五歳で亡くなっているので、康房の養子になったのは、久純が十歳の頃と推定できる。
しかし、河浪氏系図の久純とは、没年に相違がある。

「安純」通称は所兵衛。実は副島太郎兵衛の四男が久純の養子となり、多久邑の祖龍造寺長信公、初代安順公、二代茂辰公の三代にわたって仕えたとある。
安純は、片田江で生まれ、八戸町から水江大崎へ転居し、大崎で亡くなっている。
竜造寺長信が知行として豊臣秀吉から御朱印を受けたのは、
小城郡の内
多久、別府、納所、北浦、深河、江里山、初田ケ里。
杵島郡の内
志久、北方、医王寺、福母、喜佐ノ木、大渡、焼米、山口、砥川４、椛島。
佐嘉郡の内
尼寺、上嘉瀬、萩野、八戸、真木、木原、竹藤、南里、新郷、鹿子。
三根郡の内
矢俣。

以上の土地、知行高三万二千八百余石だったが、慶長十六年（1611）鍋島勝茂により、鍋島氏財政救援のため三部上地が行われ、さらに、元和七年（1621）に、龍造寺四家にたいして三年間の約束で三部上地が行われ多久の領地は八千六百余石となってしまった。

安純の転居地は、八戸、片田江大崎すべて水江龍造寺氏（多久家）の領地である。

安純の妻は徳永仁左衛門の娘。戒名を雲鏡妙紫。

徳永仁左衛門は、松浦黨の桃河嚴四郎が龍造寺長信に仕えた時に、徳永姓に改めている。仁左衛門の諱を「治」と名乗り、兄の正兵衛の諱は「持」で、孫の田（徳永栄庵後改め亨庵・号雨卿）は江戸日本橋西で医を開業し、後に佐賀藩江戸屋敷の典醫となる。漢学者でもある。

「田」の兄「厚」忠兵衛は河浪所左衛門の養子となり道重と称し、河浪家を嗣ぐ。

仁左衛門の長女は、徳寿院月照妙圓（多久長門守安順の妻千鶴）が萬治三年（1660）亡くなった時に殉死をした法名薫譽樹香である。

「治」の二女「法名雲鏡妙紫」が河浪安純の妻になっているが、雲鏡妙紫は始め河原源兵衛に嫁いで「戒名守信紹智」と権左衛門（戒名江雲浄天）の二子を産んでいる。安純に再嫁する時に安純の命で河浪家に連子している。

「守信紹智」は川久保の神代家に嫁いだのだろう川久保松阪館で亡くなるとある。

権左衛門（戒名江雲浄天）の没年は不明であるが、系図が書かれた時の、川浪家先祖とある。

安純との間に生まれたのが、戒名香蓮妙清と道忠（河浪自安）の二人である。

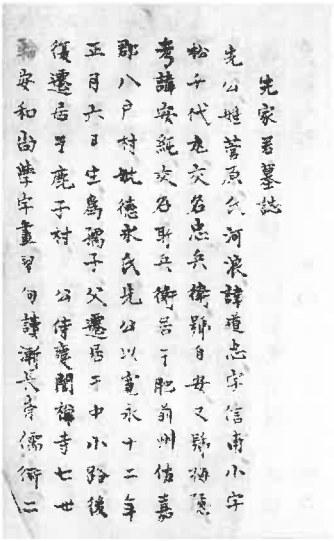
戒名香蓮妙清は、梶原安右衛門純時に嫁ぎ、その孫は石丸十兵衛良賢に嫁ぐ。石丸良賢の子供には、石丸良幹（石丸禮蔵、号亀峰。東原庠舎教官のち藩校弘道館二代目教授）、石丸良篤（東原庠舎教官）がいる。

河浪家、徳永家、石丸家は共に江戸中期の多久邑を代表する学問の家系を成している。

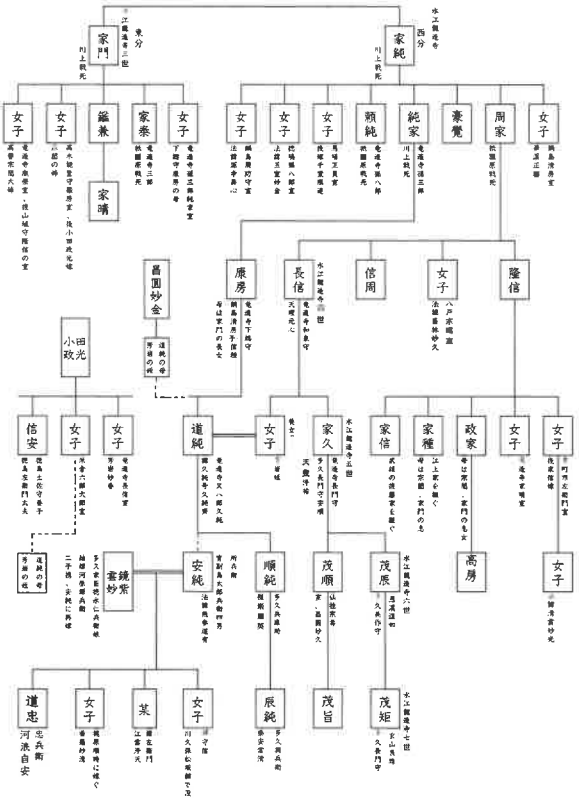
河浪氏系図の内で、自安先生の出自を確かめようと、多くの文献を管見し略系図を作成してみたが、「戒名徒伯定公」、夫人の「昌圓妙金」及び道純（久純）を特定する史料を見い出すことはできなかった。今後は文献の精査と墓碑文等の調査による解明が必要だろう。

（服部）

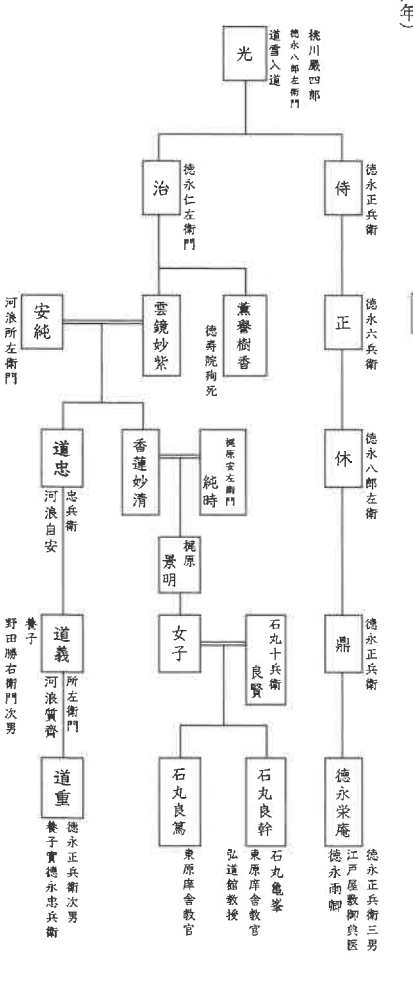
【参考文献】
『舊多久邑人物小誌』（舊多久邑史談會、一九三一年）
『水江系譜』（多久市郷土資料館蔵）
『佐賀市史・近世編』（佐賀市、一九七七）
『多久市史』人物編（多久市、二〇〇八年）
『多久諸家系図』川浪氏系図、米倉氏系図、副島氏系図、徳永氏系図（多久市郷土資料館蔵）
『水江臣記』由緒（秀村選三編集、多久古文書村、文献出版、一九八六年）
『自安先生行状』
『自安先生墓誌』（聖光寺所有、多久市郷土資料館寄託）
『歴史に埋もれた名医徳永雨卿』中尾友香梨（佐賀大学地域学歴史文化研究センター発行、二〇一一）



自安先生行状（部分）



水江龍造寺家と河浪自安の略系図①



自安の略系図②

これまでの鶴山塾

【2019年度】

中国古典の扉
（公益財団法人孔子の里理事）
武田　耕一

はじめて学ぶ古文書
（多久古文書の村　村民）
片倉 日龍雄

水江事略をよむ
（公益財団法人孔子の里常務理事）
服部　政昭

『戦国肥前の覇者　龍造寺隆信と多久』
（西南大学・西九州大学非常勤講師）
川副　義敦

『青年時代の石井鶴山』
（熊本大学准教授）
中尾 健一郎

『石井鶴山と名君鍋島治茂』
（佐賀大学准教授）
中尾 友香梨

『近世（江戸時代）に多久を訪れた人たち』
（公益財団法人鍋島報效会役員）
大園 隆二郎

『「牟田辺遺跡群に見る古代朝鮮半島の往来」の概要』
（佐賀県芸術文化協会理事長）
高島　忠平

『歴史的建造物とまちづくり』
（子どもまち研究所代表）
井上　一夫

【2018年度】

中国古典の扉
（生そば和食処太平庵社長・論語講師）
武田　耕一

はじめて学ぶ古文書
（多久古文書の村　村民）
片倉 日龍雄

拓本に親しむ（初心者コース）
（公益財団法人孔子の里常務理事）
服部　政昭

水江事略をよむ
（公益財団法人孔子の里常務理事）
服部　政昭

『米倉権兵衛清英と大隈重信』
（多久古文書の村　村民）
多久島 澄子

『孔子をみる～描かれた聖人～』
（佐賀県立博物館・美術館副館長）
福井　尚寿

『肥前国多久邑八景詩を繙く』
（福岡県漢詩連盟会長・九州国際大学客員教授）
三浦　尚司

『草場佩川の書をよむ』
（佐賀県立佐賀城本丸歴史館副館長）
古川　英文

『美しい仕事～多久古文書の村　元散事・細川章さん～』
（有田町歴史民族資料館）
尾﨑　葉子

『前多久氏と紀伊国の謎』
（公益財団法人鍋島報效会役員）
大園 隆二郎

【2017年度】

中国古典の扉
（生そば和食処太平庵社長・論語講師）
武田　耕一

はじめて学ぶ古文書
（多久古文書の村　村民）
片倉 日龍雄

婆心帖をよむ
（草場佩川の会　副会長）
尾形　恵子

肥前狛犬を石工職人と作ろう
（古賀石材店　店主）
古賀　正幸

『鍋島直重公・勝茂公の藩づくり』
（公益財団法人鍋島報效会主任学芸員）
富田　紘次

『名儒　石井鶴山』
（公益財団法人鍋島報效会役員）
大園 隆二郎

『多久と有田皿山』
（有田町歴史民族資料館）
尾﨑　葉子

『多久の歴史と文化とその背景』
（多久市郷土資料館館長）
西村　隆司

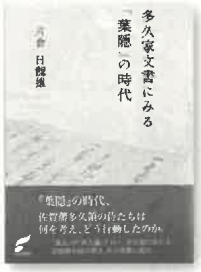
『草場佩川　～漢詩人としての人となり～』
（福岡県漢詩連盟会長・九州国際大学客員教授）
三浦　尚司

『君子として生きる　～草場佩川は書画になにを映したか～』
（佐賀県立佐賀城本丸歴史館副館長）
古川　英文

寄贈図書

『からっぽのさいふ』
野口康子 様

『耳雲詩鈔』
古田　茂 様



『多久家文書にみる
「葉隠」の時代』
片倉日龍雄 様

『埋もれた詩傑
河野鉄兜』
前田隆弘 様

『乗桂・小今井潤治翁
関係拾遺史料集』
三浦尚司 様

鶴山塾

講座案内　2020（令和２年度）

※いずれも会場は東原庠舎講堂に於いて

中国古典の扉（受講料500円）

6/6（土）、7/4（土）、8/1（土）、9/5（土）、10/3（土）
11/7（土）、12/5（土）、1/9（土）、2/6（土）、3/6（土）

・日本人にとって最も身近な中国古典である『論語』。
論語から取った文言は大変多く、「温故知新」や「切磋琢磨」などは普段の生活の中で聞くことが多いでしょう。
この講座では難しそうなイメージのある『論語』を中心に中国古典も織り交ぜながら、知識ゼロで楽しく学べる講座です。
ワンコイン講座ですので、自分の都合に合わせてご参加下さい。

（公益財団法人孔子の里理事）武田　耕一

はじめて学ぶ古文書（前期）（受講料300円）

6/13（土）、7/11（土）、8/8（土）、9/12（土）、10/10（土）

・多久に残された史料を使って学ぶ、古文書の基礎の基礎です。
時間や数字、十干十二支を学び、くずし字で武家文書の領地宛行状や御褒美帳などを読みます。
ひらがなにもチャレンジ！
誰でも始められる、やさしい古文書講座です。

（多久郷土資料館学芸員）山口 佐和子

水江事略をよむ（受講料500円）

6/20（土）、9/26（土）、12/19（土）、2/20（土）

・今年は、水江龍造寺第四世龍造寺長信公が、肥前多久梶峯城に入城してから450年の記念する年にあたります。
多久に残されている『水江事略』全19巻11冊を読み解きながら、多久の歴史を、一緒に学んでいきましょう。

（公益財団法人孔子の里常務理事）服部　政昭

はじめて学ぶ古文書（後期）（受講料300円）

11/14（土）、12/12（土）、1/9（土）、2/13（土）、3/13（土）

・先祖が残した手紙や博物館に展示している古文書を読んでみたい。
そう思われる方も少なくないと思います。しかし、古文書が現代の私たちにとって読みづらいものになっているのは確かです。
一方で、古文書の文字は日本語ですから、読める字もあるに違いありません。繰り返し読んでコツを覚えて慣れてしまえば読めるようになるはず。本講座では、実際の古文書を受講生の皆さんとともに読み解きながら進めてまいります。

（多久古文書の村　村民）舌間　輝吉

多久の歴史と文化を学ぶ講座（受講料500円）

6月27日（土）13時30分～15時

『佐賀城の歴史～竜造寺の佐賀城から鍋島氏の佐賀城へ～』

・佐賀城築城400年を契機に佐賀市と佐賀県が合同で行った文献調査の成果をもとに、竜造寺氏から鍋島氏への政権交代と、それに伴う佐賀城内の変遷について、多久家上屋敷のことも交えてお話しします。

（佐賀市教育委員会文化振興課文化財１係主任）大平　直子

7月18日（土）13時30分～15時

『再発見！龍造寺天満宮縁起絵』

・昨年再発見された《龍造寺天満宮縁起絵》を解説します。
この絵は、菅原道真の生前から没後の出来事を題材とした天神縁起を中心に描かれています。
また、龍造寺家純（1479～1545）が寄進した作品で、その制作背景についても探ります。家純は、佐賀の戦国武将で、龍造寺隆信・長信の祖父にあたります。

（佐賀県立博物館・佐賀県立美術館　前副館長）福井　尚寿

7月25日（土）13時30分～15時

『歴史に埋もれた名医一徳永雨卿』

・徳永雨卿は江戸時代中期の多久出身の名医です。
江戸に出て活躍し、のちに佐賀藩江戸藩邸の御典医に任用されました。
そして石井鶴山など、郷里から江戸に遊学してくる若者の面倒をよく見、自らが江戸で築いた幅広い人脈を彼らに提供していました。
長い間、歴史に埋もれていたその事跡を明らかにします。

（佐賀大学　教授）中尾 友香梨

8月22日（土）13時30分～15時

『石井鶴山と藪弧山』

・多久出身で佐賀藩第八代藩主の侍講に抜擢された石井鶴山は、安永・天明期の一連の藩政改革に大きく寄与しました。
藩校の運営と藩政改革の成功の秘訣を知るために、肥後・薩摩への視察も行っています。鶴山が熊本を訪れた際、熊本藩校時習館の第２代教授藪弧山との間で行われた交流について紹介します。

（熊本大学　准教授）中尾 健一郎

8月29日（土）13時30分～15時

『多久の歴史的建造物の保存と活用』

・多久には国指定重要文化財の聖廟をはじめとする価値ある歴史的建造物とその背景としても重要な歴史的景観があります。
これらは多久で豊かに暮らすための地域資源です。
　今こそみんなで力を合わせて楽しみながらその保存と活用をはかることをすすめていきましょう。

（株式会社アルセット建築研究所　取締役佐賀所長）
清水 耕一郎

2月27日（土）13時30分～15時

『蝦夷地開拓判官・島義勇と鶴田皓』

・札幌の都市計画の礎を築き、現在も北海道で敬われている島義勇。
義勇は「北海道紀行詩」として、開拓への情熱と、苦闘の足跡を40篇の漢詩に刻んだ。そして、その詩集の跋文を付したのは、多久出身の鶴田皓であった。義勇の心の声と、それに応えた鶴田皓の詩文をたどり、二人の人物とその交友を探りたい。

（佐賀県立佐賀城本丸歴史館副館長）古川　英文

問い合わせ先　公益財団法人 孔子の里　　電話 0952-75-5112

来訪・来信・雑録

10月1日　はじめて学ぶ古文書講座⑤（片倉日龍雄）
10月5日　中国古典の扉④（武田耕一）
10月19日　「水江事略をよむ⑦」（服部政昭）
10月27日　令和元年度　秋季釈菜を開催
10月30日　佐賀大学名誉教授小川博司先生来舎
11月2日　中国古典の扉⑤（武田耕一）
11月12日　はじめて学ぶ古文書講座⑥（片倉日龍雄）
11月16日　『鶴山塾』「歴史的建造物とまちづくり」（子どもまち研究所　代表　井上一夫）
11月23日　第二十五回多久市論語カルタ大会（東原庠舎東部校体育館）
12月3日　はじめて学ぶ古文書講座⑦（片倉日龍雄）
12月7日　中国古典の扉⑥（武田耕一）
12月8日　第22回全国ふるさと漢詩コンテスト表彰式・石碑除幕式
12月21日　公開講座「草場佩川と文人との交流」（久留米大学文学部教授　吉田洋一）
1月6日　新年の集い賀詞交換会（多久温泉タクアにて）
1月11日　中国古典の扉⑦（武田耕一）
1月12日　合格絵馬奉納式
1月26日　多久聖廟・文化財防火訓練
2月1日　中国古典の扉⑧（武田耕一）
2月1日～2日　草場船山の足跡を訪ねて（大坂北区龍海寺・緒方洪庵墓所、大坂中央区・大阪大学適塾記念センター、京都府永観堂禅林寺・草場船山紀念碑、知恩院・船山先生墓碑、広島県福山市・福禅寺対潮楼、廉塾黄葉夕陽村舎、官茶山記念館。
2月9日　東原庠舎講演会（明治大学名誉教授安蒜政雄氏）
2月22日　合格絵馬奉納式
2月27日　聖廟仰高門脇生垣植樹
2月29日　「水江事略をよむ⑨」（服部政昭）
3月3日　公益財団法人孔子の里理事会
3月12日　東原庠舎防火訓練
3月14日　梶峰城跡の散策
3月19日　桐野山妙覚寺涅槃図調査
3月19日　公益財団法人孔子の里評議員会
3月17日　仰高門脇生垣、猪被害再植樹
3月19日　桐野山妙覚寺涅槃図調査
3月19日　公益財団法人孔子の里評議員会
3月24日　仰高門脇生垣、猪被害再度植樹

●聖廟の森に棲む動物たち●

オオルリ

日本の青い鳥といえば、オオルリ、コルリ、ルリビタキ、カワセミと海辺に住むイソヒヨドリである。オオルリは夏鳥で春に渡ってくる。多久は通り過ぎるだけで繁殖はしない。それでも川沿いの林の中で日本三鳴鳥の美声を聞かせてくれることがある。姿はなかなか見ることはできないが、その声にはうっとりしてしまう。

山の渓谷で繁殖を終えたオオルリは全くその存在を消したかの如く多久を通過していく。上半身ブルー一色の派手であるはずのオオルリだが発見は難しい。そのうえ鳴かないから厄介だ。それでも秋の色に変化していく木の葉の中に彼を見つけると、ふっと幸せを感じ取る瞬間がある。幸せの青い鳥というが私には本当であった。

（日本野鳥の会　福田　司）

▲オオルリ（多久聖廟の森で）

公益財団法人 孔子の里　販売物

◇論語
日めくりこよみ
８００円

◇ガイドブック
『多久聖廟を歩く』
５００円

◇百人一首式
論語カルタ
３，０００円

問い合わせ先
公益財団法人 孔子の里　電話 0952-75-5112
当財団HPもしくはAmazonでも販売しています。
百人一首式論語カルタ　検索

賛助会員

新規加入　個人会員
古田　茂（愛知県弥富市）

編集後記

昨年の九州豪雨災害で農地、道路、河川の災害復旧の目途もつかない所に、新型ウイルス感染防止対策で全ての行事が自粛ムードとなってしまいました。

今年度は、多久聖廟の孔子祭行事も中止となり、（佐賀県重要無形民俗文化財）「多久聖廟春季釈菜」のみが執り行われます。

時折、遠来の参列者からは、昔ながらの古式ゆかしい祭儀のみの式典を懐古する声も聞かれていましたので、今回はこれをよい機会と考えて、三百年の時空を超えて連綿と続けられている釈菜の風情を味わいに多くの方々に訪れてほしいと願っています。

山々には、山桜や山椿、馬酔木、杏花などが新緑の中に鮮やかな彩り見せ、野鳥たちは囀り飛び回る穏やかな山里の春です。（服）

一昨年、聖堂川の畔に植栽した石楠花も花が咲きました。

しばらくは
世事追いくるな
花のもと